

罪と赦し

川 崎 清

1

四月は新しい門出を迎えて心浮き立つ人が多い。しかし、高校三年生になった川浪博は気が晴れなかった。それまで交際していた一年上級の青山愛が北海道大学農学部に合格し、三月末に東京を離れて北海道で暮らすことになったからだ。青山には新しい勉学と新しい人間関係が待っている。そして慌ただしい生活が始まる。川浪は恋人づらをしてつきまとい、青山の門出を邪魔したくはなかった。川浪は青山が北海道に発つ朝、これが関係の終わりになるのかもしれない感じた。だから見送りに行った駅のホームで青山と「さよなら」を言い交わしたとき、「またすぐに会えるね」とは言えなかったのである。以来、川浪は喪失感で心がふさがれて、桜を見ても心が華やぐことはなかった。

2

四月も最終週に入り、校内では高校生たちが連休中に何をしようか仲間と話し合う姿があちこちで見られた。川浪は、しかし、その輪には加わらず、一人で下校して最寄り駅に向かう道を歩いていた。

「川浪くん、ちょっと待って」

と呼ばれて、振り返ると、声の主は松村みどりだった。

「あッ、松村さん、何か用？」

川浪は気が抜けてほんやりして歩いていたので、愛想のないぶっきらぼうな返事しか返せなかつた。

「いま困ってるの。ちょっと助けてくれない」

松村には何かとても差し迫った様子があった。

川浪は松村とは一年の二学期から三学期にかけて共に学級委員を務め、いろいろなことを話しながら一緒に下校し、親密になった時期もあった。しかし二年生になるとクラスが別々になり、互いが新しい人間関係に時間と精力を使うようになったこともあり、疎遠になった。三年でまた同級生になったが、川浪は松村に対しよそよそしい態度をとっていた。縊りを戻すように急に振る舞うのは自分も恥ずかしいし、松村にも失礼になると感じていたからだ。だが今はそのような見栄や気まずさを咄嗟に呑み込み、松村の事情を聞くことにした。

「いま変な男の人に跡をつけられてるの。だから一緒に歩いてくれない」

「変な男って、変質者？」

「いまは詳しく説明できないわ。川浪君、駅に着いたら、一駅だけ私と同じ電車に乗って。

駅で別れてしまうと、多分、あの人は同じ電車に乗ってきちゃうと思うの」

川浪は事情を呑み込み、松村の求めに応じることにした。一年生のときのように松村と並んで歩いた。後ろを振り返ることなく歩いたが、確かに誰かがつかず離れず跡をつけてくる気配があった。駅に着いて改札を通り過ぎるとき、初めて川浪は後ろを振り返り、様子をうかがった。すると、二十代前半の男が自分たちをつけていることが分かった。松村は自分の乗る電車が来るホームに川浪と並んで足早に進んだ。思わず川浪の腕をとっていた。電車を待つ間に、何気ない話をする風を装って松村は事の次第を川浪に説明した。

「この頃下校するとき駅までの道の途中で若い男が私を待ち伏せしているの。この間も下校しててときに出合い、同じ電車に乗ったので怖くなり、途中の駅で下車してみたわ。するとその男も下車したのね。発車寸前にまた電車に飛び乗ったら、その男も乗り込もうとしたけど、扉が閉まり乗れなかったの。そしたら車内にいる私を恨めしそうにホームから見つめてたわ」

川浪は、その男が今日も待ち伏せしているので、松村は自分に声をかけたのだと理解した。

「分かった。一駅だけじゃなくて松村さんの家まで送るよ。でもまっすぐ帰宅すると家がどこか分かっちゃうから、途中で一回降りて様子を見よう。もちろん俺も一緒に降りるから」

電車が入ってきた。松村と川浪は男が乗り込むか確かめるため、発車寸前に電車に乗り込んだ。すると男もサッと一両後ろの車両に乗り込んだ。

3

—— それから二時間半後、川浪は松村の親が経営する内科医院の居間にいた ——

川浪は松村にストーカー行為を働いた青年と松村の家に向かう路上で対面し、激闘の末に暴漢を撃退したのだ。松村みどりはその間近くの民家に助けを求め警察を呼んでもらった。川浪は殴られたり蹴られたりして、口を切り、鼻血も流していた。川浪と松村は駆け付けた警察官に伴われて一緒に交番に行き事情を話して、被害届を出した。この手続きをしているときに、交番から連絡を受けた松村の母親が娘を迎えて、川浪も松村の家と一緒に来て治療を受けるように言われたのだ。川浪はやや躊躇したが、母娘に押し切られ、そのことばに従った。

診察室で松村の父親から傷の治療を受けた後、川浪は居間に通され、松村の両親と松村みどりに囲まれてすわった。両親は交互に礼を述べ、川浪の勇気を讃えた。

「川浪君、みどりを守ってくれて、本当に、本当にありがとう」

「治療をしている間に川浪君のおうちに電話して、お母さまに事情をお話ししておいたわ。とても心配されていたので、幸い大きなケガはないこと、しっかり治療をしていること、川浪君のお蔭でみどりが助けられたことなどをお話ししてお礼を申し上げたところよ」

松村みどりにとっては、今日の事件はとても怖くて嫌なことであったが、はからずも川浪を両親に紹介できることになり、両親も川浪を大いに気に入った様子なので、とても嬉しく気持ちが弾んでさえいることを感じていた。そのとき電話が鳴り、松村の母親が出ると交番からだつた。暴漢が格闘の現場から六百メートル先の路上で逮捕されたとの連絡であった。一同がほつと安堵したのを見て、川浪はそろそろ帰宅すべきだと感じて、その旨を告げた。

「治療していただいて、ありがとうございました。それじゃ、僕はこれで帰宅します」
 「川浪君、私が車で君の家まで送ろうと思うが、どうだろうか」
 「ありがとうございます。でも、この時間に偉い方が家に来ると、僕の両親も緊張しますから、電車で帰ります。大丈夫です。もうすっかり回復しましたから」
 「別に私は偉い人じゃないよ。じゃー、タクシーを呼ぶからそれに乗って帰りなさい。患者さんにもよくそうしてもらってるから」
 「川浪君、是非そうしてくださいらない。あなた、いま車を呼びますわ」
 結局、川浪は呼んでもらったタクシーでその夜は帰宅することになった。

4

翌朝川浪はまだ腫れの引かない顔で学校に行った。道行く人々は皆すれ違うたび川浪の顔をまじまじと見た。学校に着いて同学年で部活仲間の近藤良夫と会って、やっとことばの遣り取りになった。

「川浪、やけに派手にやられたなー。昨日か、誰にやられたんだ」
 「松村を受け回す変質者と殴り合ったんだよ」
 「おー、松村のために戦ったのか。嬉しいだろうな、松村は。『川浪君、頼もしいわ、大好きー』って抱きついたんじゃないかな」
 「近藤、やめろよ、茶化すなよ。松村と一緒に交番に行って事情を話し、被害届も出したんだ。そしたら交番に松村の母親が迎えに来て、俺も家に連れていかれて、松村の親父さんに治療してもらったんだ。親と会ったり、話をしたりで、気が休まらなかったよ。松村の両親は大いに感謝してくれたけど」

「川浪は娘を守った正義のナイトってわけだからなー。松村みどりは喜んでるぞー。だって、これで川浪は両親公認の『男』ってことだからな」

近藤は川浪が一年のときに松村と仲のよい時期のあったことを知る人物なので、近藤に松村とのことを冷やかされても、その場を取り繕うための否定や反論はできなかった。川浪は近藤の指摘の通り、自分が事件の成り行きで松村の両親と会ったことが、今後の松村との関係に新たな展開をもたらすことになるかもしれないと思った。

5

もう一つの事件が起きたのは連休明けの木曜日五時間目の体育の授業のことである。体育の授業は二クラス合同で実施されていた。更衣室がないためA組の教室ではA組B組の女子が一緒に体育着に着替え、B組の教室ではABの男子が着替えることになっていた。部活をしている生徒は部室で着替えた。授業後、川浪も所属する剣道部の部室で着替えていたが、同級の小倉武が呼びに来た。

「川浪、村中に頼まれたんだけど、ちょっと見て欲しいものがあるんだ。教室に来てくれ」
 「なんだ、見せたいものって」
 「村中が絵を描いたんだ。川浪に見てもらいたいって言うんだよ」

「わかった。着替えたらすぐ行く」

あきのぶ
村中顕信は川浪の同級生で美大志望の生徒であった。百八センチ九十キロの体格で、その風貌からは美大志望とは思えない男であった。その体格と押し出しの強さで男子数人を従えて、親分として振る舞っていた。川浪は着替えを終えて、体育館に隣接する部室から小倉と一緒にB組の教室に戻った。

教室では男子生徒たちが着替えながら、教卓の後ろにある黒板の方を向いて、わいわいと雑談をしていた。黒板の桟の上にはスケッチブックの画用紙が立てかけられていた。

あきのぶ
村中顕信の描いた絵はボッティチエリの「ヴィーナスの誕生」のポーズをとった女性の絵であった。ボッティチエリの絵は裸体画だが、神話世界の絵という約束の中で描かれている。要するに写実的ではないのだ。しかし、いま男子生徒たちの目に晒されている村中のデッサンは極めて写実的で、モノクロ写真のようであった。

その絵は松村みどりの絵であった。確かに「ヴィーナスの誕生」のパロディだと誰にでもわかるものだったが、松村みどりの裸体写真を公然と教室に展示したのも同然であった。描かれた顔は、村中の描写力が遺憾なく発揮されていて、松村の顔に生き写しだった。

着替えている男子生徒たちはその絵を見ながら、「松村みどりそのものだな。でも、あいつあんなにムッチリしてるかー？」などと言いあい笑いあって、村中をはやし立てていた。そのはやし立てを賞賛と勘違いして気をよくした村中は、松村と仲の良い川浪にもその絵を見せて反応を見ようと手下の小倉武をよこしたのであった。

川浪は教室に入りざわめきを聞きながら、男子生徒たちの視線の先にある絵を見て、何が起こっているのか理解した。同時に体中の血が沸騰してしまうほどの怒りに駆られた。その原因は、絵の中で松村みどりがまるで媚態を売るかのように薄笑いを浮かべてこちらを見ているように描かれていたからである。

またどういうわけか、川浪は激しい羞恥の感情も搔き立てられた。それは、ボッティチエリのヴィーナスには描かれていない恥毛が書き込まれていたからである。とりわけ後者の点は川浪の怒りを何倍にも増幅させたのである。

6

「村中、その絵、なんでそんな絵を描くんだ」

川浪の怒氣を含んだ声が教室中に響きわたった。すると村中は挑発の効果が最大になることばを言い放った。

「ムキになるなよ、川浪。週に一二回は見てんだろう、松村の裸は」

実は村中は一年生のときに川浪と松村が二人で下校する姿を苦々しい気持ちで見ていた。そして三年でまた同級生となった二人が気安くことばを交わせることを妬ましく思っていたのである。というのも、心身の成熟にともない知性にも一段と磨きがかかった松村みどりは今や校内の美形の一人になっていたからである。それで媚態を含んだ笑みを浮かべて全裸でいる松村の姿を描き、それを見世物にして、川浪を思いきり怒らせようと挑発したのであった。

歯を噛みしめ、「クーッ」とうなり声をあげて、川浪は村中の巨体めがけて飛びかかった。それは村中の想定内の展開だったので、村中は川浪の突進を受け止め、足をかけ思いきり突き飛ばした。体格と腕力に差があるので、川浪はもんどり打って生徒用の机の列に投げ飛ばされた。二列四人分の机がドミノ状に倒れて大きな音を立て、机の中に入っていた筆箱や教科書も飛び出して床にばらけてしまった。川浪は背中を机の角にしたたかに打ち付けたが、それでもすばやく身を立て直し、今度はラグビーのタックルの形で村中に向かっていった。その動きは周囲の予想よりはるかに速く、村中は川浪の頭突きを急所にもろにくらった。「グエッ」と声をあげて、村中はエビのように体を折って教卓に倒れこみ、痛さで顔をゆがめた。教卓は横に倒れて天板の角が床に激突し、けたたましい音をたてた。上に乗っていたチョーク箱が吹っ飛んで、チョークの粉が教室の前半分にモウモウと舞い上がった。

そのとき隣の教室で着替えを終えた女子生徒が戻ってきて、男子生徒の喧嘩騒ぎを見ることになった。黒板の棟に立てかけられた絵に気が付いて、女子たちも喧嘩の原因をすぐに理解した。松村みどりも戻ってきて、その絵を見て事の次第を一瞬で把握した。

川浪は村中の顔面を殴りつけた。こぶしは顔面にあたったが、自分も村中のパンチを左顔面にくらい、再び体ごとすっ飛んだ。川浪の鼻から血が噴き出して流れ、女子生徒たちは悲鳴をあげた。

「止めろ、止めろ」

黒崎智^{さとし}が叫んだ。しかし、仲裁に入る勇気のある者は男子生徒からは出なかった。

「ちょっと、二人ともやめて。やめなさいってばッ」

甲高い声で割って入ったのはクラスで一番小柄な永井京子であった。永井は体は小さいが物怖じしないで行動する性格なのだ。今回も男子が割って入ったとしても、二人の勢いを止め、喧嘩を制止することはできなかつただろう。しかし、一番小柄な女子生徒が二人の間に立ち、一喝することで、二人はその場でピタッと動きを止めて、荒い息をしながら睨みあうことになった。

丁度そのとき、六時間目の古文担当教諭、木村省吾先生が教室に入ってきた。それと入れ替わりに松村みどりが荷物も持たずに俯いて教室の後ろの戸口から足早に出ていった。

「なんだ、喧嘩なんかして。暴力はいかん。授業ができるように教室を整えなさい」

木村先生は取りあえず場をおさめるためにことばを発し様子をうかがった。村中のデッサンは小倉武がスケッチブックをすばやくたたんで、立っている村中に渡した。川浪は流れる鼻血を拭こうともせずに立っていた。木村先生が状況を理解して言った。

「川浪と村中か……まず二人とも保健室に行って治療しなさい。それが終わったら、生徒指導部の大岡先生に報告に行きなさい。他の人は授業に集中する。いいね」

そう言って、木村先生は二人を保健室に連れて行き、治療を受けさせた。それから自分だけで大岡先生のいる美術室に連絡に行き、終わると古文の授業をするため教室に戻っていった。

の前の椅子に座らせ、二人の顔をかわるがわる見て口を切った。

「元気があるなー、お前らは。しかし、もう殴り合いで事を決する歳ではないだろう。中三までだ、そんなのは。どっちが先に手を出したんだ」

「……僕です」

川浪は下を向いて、ぼそとした口調で言った。大岡先生はそれを聞くと、すぐに尋ねた。

「殴って解決する問題なのか」

大岡先生は二人に答える時間を与えたが、二人とも黙っているので、話を進めた。

「川浪、殴り合って済む問題なんてないんだよ。カッとなって相手を殴れば、一時的にはスカッとするかもしれないがな。だが、それでは問題を乗り越える知恵が身につかないんだ。高三なら、知恵がつくように、頭の中身で喧嘩しろ。ところで原因はなんなんだ？」

そう訊かれても二人は黙っていたが、しばらくして村中が抱えていたスケッチブックを開いて松村を描いたデッサンを見せた。大岡先生は少しの間それを見ていたが、やがて大きな声で笑い出してことばを続けた。

「村中、お前ほんとに美大志望なのか。これじゃ中学生の漫画じゃないか。いやそれ以下だ」
そう言うと今度は神妙な面持ちで諭すように言った。

「だいたいモデルでもない人間に許諾も得ずにその人の裸体を描くのはいかん。また誰だか特定できるように写実的に描いてるのも卑劣だ。そして一番いけないのは、見る者の欲情をそそることだけを目的にしていることだ。だから、ことさら卑猥な面差しにしたり、安易に恥毛を描いたりしている。こんなのは芸術を目指す人間は絶対描かない。もし画家が描くなら、情欲で頭が一杯のエロ人間が見ても、その情欲を頭から洗い流すような人間の本質的美しさを描くのが画家なんだ。分かったか、村中。モジリアニだ、裸体画ならモジリアニを研究しろ」

大岡先生は説教を済ませ、二人に六時間目の授業に戻るよう促した。そして二人が美術室を出ていくと、生徒指導日誌に事情聴取内容を記入した。

8

喧嘩のあった翌日、川浪はいつもと同様に登校した。村中もいた。もう一人の当事者の松村みどりはまだ来ていなかった。松村は昨日は教科書と鞄を自席に置いたまま早退していた。自分の裸身を描いたデッサンをみんなに見られた後で、なお平静に授業に出る気持にはなれなかつたからだろう。そのようにクラスの皆は理解し同情していた。その松村が登校してくると、男子生徒は目を合わせないようにして後ろめたさを隠した。女子生徒はいつもと同じように「おはよう」とあいさつを交わした。普段通りに振舞うことが一番の配慮と考えたからであった。

一時間目の数学の授業になった。例題と解答の説明が済むと、担当の石黒先生は黒板に二題応用問題を書いた。十分ほど生徒たちに解答時間を与えた後、石黒先生は松村みどりを指名し、第一問目の解答を黒板に書くように言った。松村は「ハイ」と返事をして自席から黒板の前に進み出て、チョークで解答を書き始めた。よりによって注目を浴びている本人がその姿を皆の視線に晒すことになったのだ。川浪は松村に同情したが、松村はいつもの冷静な表情で解答の

数式を一行また一行と書きつけていった。

川浪は黒板に数式を書きつける松村の後ろ姿を見ていた。制服である濃紺の上衣、ボックスプリーツのスカートを着用した松村は数式を書く手を時々休め、式を見直しながら書き進めた。一年生のときは肩口にまでかかっていた髪が三年生の今はさっぱりと短めになり、動くと白い襟足が少し見えて、清楚で知的な感じが一層増していた。

解答を書きつけている松村みどりを見ながら、川浪は人知れず煩悶していた。黒板の前にいる松村の姿に、ヴィーナスに扮した松村の裸の姿が重なってしまうのだ。村中が描いたあの卑猥なデッサンを思い浮かべてしまうのだ。何度もそのイメージを頭から振り払おうとして、実際に頭を小刻みに振ったり、目をしばたいたりした。しかし、どうしても振り払うことはできなかった。

松村みどりが解答を書き終えて自席に戻るとき、川浪の方に一瞬視線を向けた。川浪は自分の頭の中を見透かされたように感じて、ビクッとしてしまった。その瞬間、頭の中にひらめきが走った。そのひらめきで川浪は昨日の自分の心の動きを始めて理解した。

昨日、村中のデッサンを見たとき、川浪は怒りに駆られ、村中と対決した。が、そのとき怒りと同時に激しい羞恥の感情も呼び起こされていた。その羞恥は今のひらめきに照らすと、川浪が普段は抑圧している欲望を村中に見透かされ、それを映像化されて見せつけられたからではなかっただろうか。心の奥底に潜む、隠しておきたい部分を容赦なく白日の下に晒されたからではなかっただろうか。

言うまでもなく村中の行為は卑劣ではあるが、中身が卑猥なのは村中も自分も同じだと今始めて川浪は悟った。そして、村中との殴り合いはクラスの大半の生徒が思っているような、松村みどりの名誉を守るために英雄的行為などではなく、自身の狼狽を隠すための悪あがきだったことも今なら分かるのであった。

9

数学の時間が終わった後、川浪は意を決して村中に声をかけた。

「村中、昨日の絵だけど、松村の目の前で破いてくれないか。俺、別に本人に頼まれたわけじゃないけど、やっぱりあーゆーのは破棄するのが筋だと思うんだ」

村中は川浪が松村の心証をよくしようとして言ってるのかと思い懲りにさわったが、川浪の次のことばを聞いて、川浪にそんな気持ちがないことを理解した。

「俺、最初あの絵を見て腹が立ったけど、同時に恥ずかしかったんだ。お前に俺の心の中を見透かされた気になって……お前の見抜いた通りだ……図星だよ。俺も女の裸を思い浮かべることがある。でも、そういう男の淫らさを表すためにクラスにいる特定の女子の裸を描いて、しかもそれをクラスのみんなに見せびらかすのはよくないと思う。描かれた本人だったら、本当に嫌な気持がすると思うよ。俺、大岡先生に昼休みに部屋に来るよう言われてるんだけど……」

「俺も呼ばれてる。大岡先生に預けてある昨日の絵のことだと思う。松村も呼ばれてると思う。昼休みの十二時半に美術室に行くんだ」

川浪と村中は指定された時間に大岡先生のいる美術室に行った。すると松村みどりが既に来ていて大岡先生と話をしていた。川浪たちを迎えて、大岡先生が口を切った。

「村中、まず松村に謝れ。そしてあのくだらない絵を松村の目の前で破れ、理由は分かっているな」

大岡先生に言われて、村中は松村の方に顔を向けた。しかし、松村の目を見ることはできなかった。

「……まっ、松村、松村さん、あんな絵を描いてしまい、すみませんでした」

村中はどうにか謝罪のことばを述べた。そして、大岡先生から昨日のスケッチブックを受け取って、松村が描かれている画用紙を取り出した。その用紙を松村に見せながら二つに破り、それをまた数回破って細かな紙片にした。

「よし、今度は川浪だ。川浪は村中に先に暴力を振るったことを謝れ」

「えっ、俺が村中に謝るんですか？ 俺、被害者だと思うんだけど……いえっ、ですけど」

「ことばで言えば済むことを暴力で始めたのは川浪だろ。その点を謝るべきだ」

「分かりました。村中、えーと、村中君、すまない。俺、もっと冷静に君のいけない点を批判すべきだった。もういきなり殴りかからないよ。悪かった」

男二人の謝罪を聞き終わると大岡先生は松村の方を向いて、言った。

「松村、これでいいか。村中に対して何か言いたいことがあれば言いなさい」

松村みどりは澄んだ目を強く見張って村中をまっすぐに見た。そして何か言おうとした。しかし、結局何も言わず、唇を少し噛みしめただけであった。けれども、その力のこもった視線だけで、自分の裸を思い浮かべながらデッサンを描き、人に見せびらかした男への深い軽蔑の念は十分に表現されていた。

「松村、この後、この二人はたっぷり私が絞ってやるから。じゃ、教室に戻りなさい」

松村が一礼して美術室から出ていくのを見届けて、大岡先生は再び村中と川浪の方を向いて語りだした。

「村中、今回一番悪いのはやはりお前だ。デッサンも稚拙でお話しにならん。それに描く動機が馬鹿げてる。まず第一に、見る者の色情をそそることを目的とし、松村をその色情の対象に据えてることがいかん。第二に、松村と仲のいい川浪の気持を逆なですることを狙って描いてるのがよくないし、男として情けないってことだ。村中、昨日の今日だが、モジリアニを調べてみたか？ 分かったことがあれば、いま言ってみろ」

「はっ、はい。イタリアの画家モジリアニは三十五年の生涯で一回だけパリで個展を開きました。死ぬ三年前の一九一七年のことです。作品の中に裸婦を描いた絵があったんですが、警察が検閲してそれを猥褻と認定し、一日で撤去したそうです。美術辞典で調べただけなんで、なぜ猥褻なのかは僕にはわかりませんでした」

大岡先生は村中のことばを継いだ。

「そうか、じゃ説明してやろう。なぜ猥褻とされたかというと、恥毛が描かれていたからな

んだ。当時の西欧では、裸体画で恥毛を描くのはタブーだった。人間の裸体を写実的に具象的に描くことがタブーだったんだよ。でもこの古臭いタブー意識にも学ぶべきものはある。ただ見える通りに形をなぞり、外から見える通りの色合いで裸体を描くだけなら、いっそ写真に撮ればいい。実物に忠実な女の形と色を描けば欲情を搔き立てるには十分だからだ。しかし画家は、外面や表面を忠実になぞる写実を目指しはしない。そうじゃなくて、形や色として表面や外面に出てくる前の、その人物の持つ生命力というか、世界に場所を占めようとする意志力とか、そういうものに形と色彩を与えることで絵としての裸体を表そうとしてるんだ。モジアニアの裸婦像は女性の意志力を独特の見方で、すなわち独特の形と色で表現している。当時はただ恥毛が描かれているだけで一律に猥褻とされたが、その絵を現在の目で見れば、卑猥という印象はまったくないと思う。まー、村中、お前の絵にはこれだけの思想的基盤は、当然、ない。ただ女の形をなぞり、恥毛を描いて、人の情欲を搔き立てようとしているだけだ。だから卑猥なんだ。もう一度一から勉強し直せ。川浪、絵の話だったが、お前にも繋がる面があるかと思う。お前の目指す道に生かしてくれ」

大岡先生の長広舌を村中も川浪もしっかりと聴いていた。大岡先生が何を理解させようとしているか分かる気がした。二人は自分の取り組むべき課題を自覚して美術室を後にした。

10

その日六時間目が終わると、川浪は松村に声をかけた。

「松村さん、駅まで一緒していいかな。俺、なんか今日複雑な心境なんだ」

松村は、今回も川浪が自分の危機を救ってくれたと感じていたから、思いやりのこもった笑顔で応えた。

「いいわよ。複雑な心境って、どんな心境かしら？ 打ち明けてくれる相手が私でいいのかなあ？ 私じゃいいアドバイスができるかわからないわよ」

二人は校門を出て、駅まで続く桜並木の道に向かった。桜の木はどの枝も新緑の葉を豊かに繁らせ、初夏の日差しを受けてつやつやと輝いていた。川浪が話し始めた。

「昨日村中と喧嘩した件で、今日大岡先生に二人とも怒られたじゃない、で、いろいろ反省したんだ。もちろん、悪いのはあんな絵を描いた村中で、俺、すごく腹を立てて取っ組み合いしたけど、同時になんて言うか、あいつに俺の心の内を見透かされたって気持があって、恥ずかしいってところもあったんだ。今日になると悪いのはあいつだけじゃない、俺も悪いって気が付いたんだ」

松村みどりは、卑猥な想像で描かれた自身の裸身を人目に晒されて怒っていたので、悪いのは村中一人と決めて迷わなかった。だから、川浪に自分も悪いと自省のことばを吐かれると、その意味するところが理解できなかった。

「悪いのは村中君だけじゃないって、どういうこと？」

「うーん、なんていうか、村中も男だし、俺も男なんだよ。だからー、んー、なんていったら分かってもらえるのかなー」

「なに、俺も男って、当たり前じゃない。分かるようにちゃんと説明してくれない」

松村に更に問われて、川浪は説明すべきかどうか迷っていた。説明すれば、それは淫らな気持を自分が持っていることの余りにもあからさまな暴露になり、松村の軽蔑の対象になることは確実だからだ。しかし、話の流れから、自分の心にあることをことばにしなくては示しがつかないと感じて、川浪は結果も考えずに言い出していた。

「おっ、おれも、松村さんの体つきっていうか、はっ、裸を想像することがあるんだ。いつ、いつもってわけじゃないよ」

言いながらも迷っていたので、何度もつかえてしまった。

「えッ、今なんて言ったの？ 川浪君も私の裸の姿を想像することがあるって言ったの？」

松村は、男性雑誌やスポーツ新聞に男の淫らな気持を刺激する女性の写真や図画が氾濫していることを知っていた。そして男が淫らな欲求を満たすために、その愚劣と思える商品をわざわざ金を出して購入する生き物であることも知っていた。でも身近にいる川浪ですが、こともあろうに松村自身の裸身を思い描くことがあるとは、その告白を自分の耳で聞いてもすぐには理解しかねたのである。しかし一瞬の後、ことばの意味がやっと頭に入つて来て、松村は恥ずかしさに顔を赤らめて言った。

「不潔、最低。川浪君まで、そんないやらしいことしてんなんて。離れて、寄らないで」

「裸じゃないんだ、違うんだよ……なんていいうのかな……異性に好意を持つって、そういう部分もあるんじゃない？」

「そんな部分あるわけないじゃない。そんなこと考えたこともないわ。こっち見ないで」

川浪はやはり軽蔑されてしまったと思い、誤解を解こうと必死にことばを繰り出した。

「異性に好意を持つって、もちろん、人柄や性格が好きになるじゃない。そして容姿にも惹かれる。そのとき相手の顔かたちが好きになるよね、それが『容^{よう}』だよね。そして『姿^し』はすぐたかたち、つまり体つき。それもいいなって、思うんだ。だから俺が言つてるのは、異性に惹かれるってのは、表に出ている顔の感じが気に入り、服に覆われてるけど、なんとなく分かる体つきも思い浮かべて気に入るんだよ。そのとき思い浮かべるすがたかたちは、裸じゃない、裸じゃないんだよ……だけど……でも、やっぱり……」

「やっぱり、なんなのよ、結局裸ってことでしょ。いやらしい。見ないで、来ないでッ」

松村は川浪から離れて、駅に向かって小走りして行ってしまった。

11

それから十日ほど川浪は松村に教室で会つても口をきいてもらえないし、目を合わすことさえしてもらえない日を送った。偶然に廊下で行きあわせても、松村は重罪を犯しそうな人間に遭遇したかのように端によって、避けるそぶりを隠さなかった。

川浪はわざわざ口に出して言わなければよかったと思った。だが一方で、異性に惹かれる気持には、松村がいやらしいと決めつけた部分もやはり含まれるはずだと思っていた。

そのとき永井京子が声をかけてきた。村中との喧嘩を止めに入ったときと同じように、物怖

じせずすばりと訊いてきた。

「川浪君、この頃元気ないわね。なんかあったの、松村さんとも口きいてないし」

「あっ、永井さんか。わかっちゃう？俺、嫌われちゃったよ。松村さんに」

「えー、あんなに松村さんのために戦ったのに？なんか言ったんじゃない、へんなこと？」

「へんかなー？村中だけが悪いんじゃなくて、俺も同じなんだって。村中の絵みたいなこと、俺も考えることあるって言ったんだ。そしたら怒っちゃって……嫌われちゃったんだよ」

「あんなことがあつただけでショックなのに、村中君とおんなじことを川浪君までが想像するなんて言われて、きっと心の整理がつかないんだわ。いいわ、川浪君しょげてるって、それとなく松村さんに伝えておくわ」

この遣り取りで永井と別れた川浪は、今度は剣道部仲間の近藤良夫と行きあわせた。近藤には永井に話したこと昨日話してあった。

「川浪、今日も松村との関係修復はできていって顔だな。そんなときは道場で竹刀を千本振れ。そうすれば迷いは消える。しかし、村中のヌード絵事件の翌日に、自分も村中と同じことを考えるって松村に言うってのも、馬鹿だよなー、つくづく。確かに、恋は顔、体、そして心の三つが気に入れば言うことなしだ。しかし、全部そろっていいっていうのはめったにない。俺もF組の前川朋子の顔と体はいいと思うが、心はいまいちと思ってる。意地が悪いんだ。要するに、剣道は心技体、恋は顔、体、心。男も女もみんなそう思ってんだ」

川浪は近藤のいつもながらの豪快なまとめと解説に納得せざるを得なかった。その日は近藤と一緒に剣道場に行き、剣道着に着替えて竹刀を力一杯振った。

12

翌日、川浪が登校し自分の教室に行くと、松村みどりが先に来ていた。目が合うと「おはよう」とあいさつをされた。二週間ぶりの松村とのあいさつであった。続けて松村が言った。

「永井さんにまで、川浪君のこと言われちゃった。もう赦してあげてって。でも、赦すには本当に心を浄めて欲しいよね。明日土曜日だけど、午後つきあってくれるかしら？」

川浪にとって、松村と二人でことばを交わせる空間は、そこだけなぜか空気がとてもやわらかく感じられるのであった。二週間口をきいてもらえなかつたので、そのやわらかい空気を再び味わえる喜びがこみあげてきた。そして軽やかに返事をしていた。

「わかった。つきあうよ。どっか行くの？」

「急だけど、築地に行こうと思うの。ねっ、一緒に行きましょうよ」

「えっ、築地。魚市場に行くの？いいよ、面白そうだね」

「違うのよ。市場じゃなくて、築地本願寺と聖路加病院。実はね、昔、父と母が聖路加病院に勤めていたの。だから小学校は聖路加病院の裏手にある明石小学校に通つたの。毎朝父が運転する車に母と一緒に私も乗つて通学したのよ」

「そうだったの。すごいなー。でも、病院は両親の勤務先だったってことで行くわかるけど、お寺はなんで行くの？」

「ちょっと複雑な事情があるの。明日お話しできたら、話すわ。じゃ、明日、行ける用意してきてね。それじゃ、明日ね」

13

その日は土曜日で四時間目の授業が終わると、松村と川浪は一緒に下校せず、それぞれ別々に電車に乗り、新宿駅で落ち合うことにした。目立って変な取沙汰をされないようにしたのだ。そして新宿駅で一緒に山手線に乗り、有楽町駅で降りた。

「久しぶりだわ、この界隈を歩くのは。晴海通りって、魚河岸があるせいかとても威勢のいい人が多いの。海が近いので開放的な感じもあるしね。今回みたいに心の落ち込んだときに来たいと思ってた場所なのよ。それに川浪君には築地本願寺にお参りし、これまでの生き方反省して心を淨めて欲しいしね」

「反省して心を淨めるって、村中と同じことを俺が考えるってこと？ あれは松村さん、誤解してるよ。俺の説明も下手だったけど。俺、そんなにいやらしくないよ」

二人は歌舞伎座を左手に見て通り過ぎ、新大橋通りとの交差点を渡った。そして築地本願寺の正門を通り、横長の壮大な本堂と向かいあった。川浪は築地本願寺の境内に入るの初めてだった。目の前に展開する本堂の姿は日本の寺院とはその趣がまったく異なるので驚いていた。

「なんか日本のお寺じゃないみたい。京都の西本願寺も東本願寺も修学旅行で行ったけど、築地本願寺はそれらとまるで雰囲気が違うね。カンボジアのアンコール・ワットみたいだ」

「この本堂は一九二三年の関東大震災で壊れた本堂を立て直したものなの。前の本堂は日本式の大きなお寺だったそうよ。いま見てる本堂は建築家で東京帝国大学教授の伊東忠太という人が設計したんですって。伊東忠太は古代インドの寺院建築を研究していて、その成果を築地本願寺の再建に活かしたそうなのね。だからこの本堂の形は古代インドの寺院にならったものなんですって。そしてまた震災がきても、もう壊れないように鉄筋コンクリートで造ったと聞いてるわ」

「へー、すごいこと知ってるんだね」

「小学校時代は、放課後ここで遊ぶことも多かったの。父か母が仕事を終えて迎えに来るまでね。だから人に教えてもらったりして、自然にいろいろなことを憶えたのよ」

「あまり子供が遊べるところじゃないみたいだけど。地元の友達と一緒に遊んだの？」

「地元の子とは小学校の中で遊んで、三時からは聖路加病院の礼拝堂に行って一人で遊んだり、休んだりしてたわね。それからね、本願寺に来たのは」

松村と川浪は境内を進み、背中に翼の生えた獅子の石像が左右に鎮座する石の階段を上がり、最上部がステンドグラスで飾られた大扉を通って本堂の中に入った。本堂内は高校の体育館二つ分ほどの大きな空間で日本寺院と同様の造りであった。正面には金色の本尊が安置されていた。仏像は小さいものであったが、威厳に満ちた顔立ちをしていて、厳肅な気持ちにさせられた。堂内は馥郁たるお香のかおりで満たされていた。

「川浪君、どう築地本願寺は？ いいところでしょ。それじゃ今度は、聖路加病院の聖ルカ礼

拝堂に行きましょうか」

松村は小学校時代の思い出を早くたどりたいのか、やや急ぎ立てるようにして次の目的地に川浪を誘った。^{いざな}十分も歩くと、聖路加病院聖ルカ礼拝堂に着いた。あっけないほど小さく簡素な入口から内部に入ると、聖路加病院の創設者トイスター博士のレリーフ像とその説明版があった。それには、聖路加病院は一九〇一年に創設された歴史ある病院であり、当時の礼拝堂は関東大震災で倒壊し、この礼拝堂は一九三六年に再建されたものであることが書かれていた。二階に上がると礼拝堂の入口があり、二人は堂内に入った。

礼拝堂の中には誰もいなかった。内部を照らす光源は左右壁面にあるステンドグラスと中央祭壇背後のステンドグラスから差し込む自然光だけであり、中央祭壇には十字架が据えられていた。プロテスタント教会なので、カトリック教会にあるキリスト磔刑像や聖母子像もなく、簡素ではあるが独特の厳肅さと静寂が堂内を支配していた。

14

「ところで、昨日なんか俺に話したいことがあるって言ってたけど、ここに来ていた当時のことなの？」静寂を破って川浪は松村に話しかけた。

「生まれてから今までのことよ。川浪君にお話ししても迷惑になるだけとは思うけど、胸の底につかえてることを口に出して楽になりたい気持があるの。家の恥ずかしいことなんだけど、川浪君なら両親にも会って、その人柄を知ってるし、分かってもらえるかなって……」

「深刻な話なら、俺なんかより永井さんの方がいいかもしれないよ。彼女は他人のことでもきちんと受け止めて、適切な助言をくれるからね」

「学校のことだったら永井さんも頼りになるわ。でも、家のことなのよ。私の両親って、医師でもあるし、仲もよくて問題なさそうに見えたでしょ。でも、実は、重い問題も抱えていて、まだ解決していないの。私自身もそのことに大きな責任があるって思ってるわ」

「両親が抱えてる重い問題に、普通子供は責任ないんじゃない、関係はあっても」

「普通はそうよね。でも、この場合、問題の核心が私だって言ってもいいくらいなの。実は、私の父は母とは再婚なのね。父は前の妻の人とは十二年間夫婦だったんだけど、その人とまだ婚姻関係にあるうちに私の母と知りあって、そして私が母のおなかの中にいることがわかったの。前の妻は人柄のいい立派な人で、短大で英語を教えていたから収入もあり、誇りも高い人だった。だから、このことが分かったら、静かに身を引いて離婚してくれたそうなの。このことを私は中学二年生まで知らなかった。父の妹、つまり私の叔母が法事で家に来たときに、私に話してくれて……ショックだったわ。私が離婚の原因だったなんて。それを知ったら、父と母がとても嫌な人に思えて、口もききたくなくなって、学校にも行かなくなつたの。中学二年の二学期に二か月も登校拒否してたのよ」

「聞いちゃっていいのかな……ほんとに重い話だから。でも、そんなこと知いたら、子供はショックだよね。俺んちもいろいろ問題はあるけど、そういう問題というか心配はないから」

「わたし、父も母も身勝手で不潔に思えて仕方なかった。よりによって自分の両親が男女関

係で赦されない仲になったなんて。いまの生活が前の妻の犠牲の上に成り立ってて、その犠牲になんの償いもしないなんて。いつも清く正しく生きることを私に教えてきたのに、自分たちは清くも正しくもないなんて、裏切られたと思った。だから、反抗したし、学校にも行かなかつたの」

川浪は松村をなんとか慰めたかった。しかし、問題の性質上、何をどのように伝えれば松村の気持を安らかにすることが出来るのか全く見当がつかなかった。それでもことばを継いだ。

「でも、松村さんはそのことに責任はないと思う。両親はなんか、なんというか、ちゃんとしなくちゃいけないことがあるとは思うけど」

「父と母は好きだけど、やはり筋の通らないことをしている。私自身もその罪の結果としてこの世に生を受けてるので、私自身にも罪の穢れがある気がするの」

「よく道ならぬ恋とか、不義の子とかいうね。でも、子供に罪はないよ、しようがないもん」

「いま川浪君が言った通りの子供なの、私……道ならぬ恋から生まれた不義の子なの」

川浪は取り返しのつかないことを言ってしまったと後悔した。台無しだ、どう情勢を挽回すべきか必死にことばを探しながら話を続けた。

「道にはずれたことをしたのは松村さんじゃないよ。だから松村さんには何の責任もない」

「でも、父と母は何も悪いことをしていない人の信頼を裏切って、自分たちの都合だけを通したよ。その償いをしなくちゃいけないじゃない。でも父も母も何も償いをしていない。自分たちの都合の最大の結果が私の出生でしょ。だから償いをするのは私の運命だと思う」

「償いは松村さんのお父さんとお母さんがするんだよ……もう何かしてるんじゃない？」

「前の妻はお金などは一切受け取らない人なの。だから離婚の調停すらしないで、ただ家を出たんですって。父も母もどう償ったらいいのか、ずっと考えてはいるらしいわ。叔母はその人とは仲が良くて今でもお付き合いしているのね。叔母はこのことで父のことを軽蔑してるし、母のことは憎んでさえいるみたい。だから、意地悪のつもりで、父と母の結婚について私にわざわざ教えたのね。でも、言ってもらってよかった。私、自分の命の意味や、人が罪を犯したときにどう償いをすべきか考えることができたから。何も知らずにぼんやり生きているよりずっとよかったと思う」

「お父さんは前の妻をもう好きじゃなくなってたのかな、松村さんのお母さんと会ったときは。結婚って愛情で結ばれるんだよね。愛情がなくなったら、結婚してる意味ないんじゃない」

「だからって、すぐに別の人と結ばれていいの？自分を信頼している人を裏切って」

松村はことばを切って、一二秒川浪の顔を見つめた。その眼には両親を告発することばを吐く自分自身に対する深い自己嫌惡の影が宿っていた。そしてやっと次のことばを続けた。

「うーん、実はね、父も母も自分たちはいけないことをしたという自覚はあるの。だからいろいろなところに相談に行ってた。まずは聖路加の聖ルカ礼拝堂の牧師様、そして築地本願寺のお坊様のところなんかね」

川浪は話があまりにも深刻で、自分の経験で得た知識からは適切なことばを引き出せないこ

とを自覚した。松村は話すほどに表情が暗くなり、いつもの弾むような声とは異なる沈んだ声で話を続けた。

「母はヨハネによる福音書にある姦淫の現場で捕らえられた女性の話を牧師様に教えられて、少しだけ気が休まったような」

「どうしてかな？ どんな話なの？」

川浪は聖書についてはほとんど知識がなかったので質問した。

「モーセの教えには姦淫をした女は石で打ち殺すように書いてあるのね。イエス様は愛と赦しを説いてたんだけど、その場所にイエス様に反感を持つ人たちが姦淫を犯した女を連れてきて、イエス様を試したの。この女性をどうするのかと迫ってね。もしイエス様が、自分が説いている赦しに従って『その女を赦せ』と言えば、モーセの律法に背くことになる。でも『打ち殺せ』と言えば、イエス様の説く赦しに反することになるの。そこでイエス様はおっしゃったの。『あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい』って。するとその場にいた人々は一人また一人とその場を去って、皆いなくなつた。イエス様はその場に残された女性に『あなたは赦された。もう同じ過ちを繰り返さないように』と諭されたんですって。母は聖書のこの話に慰められたらしく、心の拠り所としているわ」

川浪は聖書の話に圧倒されていた。とりわけイエスの鋭い論法に感じ入っていた。罪を犯したことのない人なんて、この世にいるのだろうか、と思った。そして更に質問をした。

「お父さんはどうしたの？ 聖書の話でやはり救いを得たの？」

「父は本願寺のお坊様に親鸞の教えを教わったのね。『善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや』ということばなんだけど。これは唯円^{ゆいえん}という親鸞のお弟子さんが親鸞のことばとして伝えたものの。善人はもちろん救われるけれど、悪人こそ阿弥陀様^{あみだ}が救おうとしている人たちだっていう意味らしいわ。父は自分の罪は赦されるはずのない重い罪だけど、そういう自分も仏様に見捨てられることはない、という教えに心を慰められているらしいの」

15

川浪は松村の話しぶりから、彼女が自分の両親の行動に満足していないことを感じていた。

「ご両親の償いへの努力について松村さんはどう思うの？」

「母も父も自分たちが罪を犯した自覚があるのはいいんだけど、罪を赦される話を聞いて、安心してるだけって気もする。もしそうだったら、ずいぶん安易でやすっぽい償いだと思う。イエス様の話だって、罪を一つも犯さない人はいないんだから、そこを突けば、誰もその女性を罰せない。親鸞の話も、悪人こそ救いの対象だと言っていて、悪人には都合がいい。父にも母にも都合のいい話なので、それで安心してるんなら、私はそれは償いじゃないと思う」

松村は両親を責めることに対する良心の呵責が募るのか、悲しみを湛えた苦しそうな表情になった。川浪はその表情の変化を見て、松村が両親と自分はどうしたら罪を償えるのか、ずっと心を痛めてきたのだと思った。話をどう進めるべきかよく分からなかつたが、川浪は話し始めた。

「ご両親は、聖書や親鸞の話を聞いても、自分たちはその罪を赦されるとは思っていないんじゃない？俺、さっきの話、どっちも初めて聞いたけど、自分が赦される話とは思えなかった。だって、姦淫した女は悪いけど、俺自身だって小さな罪を重ねてるし、嘘についてそのままにしてすることもあるから、その女性を責めることはできないって思ったし……」

「そうね、イエス様のお話は自分も罪人だって気付かせてくれるわね。でも、父には親鸞のお話で安心して欲しくない。だって父は罪を犯してるんだから」

「親鸞の話って、普通と逆だよね。普通は、悪人だって仏様は助けてくれるんだから、善人なら絶対救ってくれるって思うよね。この世に善人と悪人の二種類しかいないならね。でも本当はこの世には一種類しかいないって考えると、親鸞の話は分かりやすくなると思う。俺、聖書の話を先に聞いたじゃない、だからこの世には罪を犯した悪人しかいないって考えたんだ。そして親鸞も聖書と同じことを違う言い方で言ってるって思った。罪を犯して、それを自覚しないで自分を善人と思ってる悪人と、罪を自覚して悪人がいるんだ。だから自分を善人と思ってる悪人さえ救ってくれるんだから、罪を犯したと自覚して悪人なら余計に仏様は救ってくれると親鸞は言ってるって思ったんだ」

松村みどりは川浪の話を一言も聞き漏らすまいと真剣に耳を傾けていた。

「本願寺のお坊さんに教えていただいた解釈では、自力で善行を積めば救われるを考える人がここで言う善人なの。悪人は悪いことをしたので自力ではもう救われない、仏様の慈悲にすがるしかないと思う人、という意味なのね。だから川浪君の言うのとは違うけど、川浪君の解釈も筋が通ってると思うわ。案外、川浪君の方が真実かもしれないとすら思える」

「大事なことだけど、俺、松村さんのお父さんもお母さんも聖書や親鸞の話を聞いて、それで安心なんかしてないと思う。かえって自分の罪を重く自覚して、償うにはどうしたらいいのかより深く考えたんじゃない。そして償いとして、自分にできることを毎日しっかりしてるんだと思う。松村さんと一緒に下校したとき、俺、悪い男と格闘して怪我したじゃない。そしたらあんなに真剣にそして丁寧に治療してくれて、俺、医者って偉いなーって思ったんだ」

松村は話を聞いていて、川浪が自分を励まそうとして言っているだけでなく、父と母に本当に並々ならぬ敬意を抱いていることを感じ取り、胸が一杯になった。川浪の気持が嬉しくて涙がこみあげてきて目からこぼれ落ちた。川浪は十字架を背にして頬を濡らしている松村の表情を見て、胸が強く痛んだ。慰めようと両腕を伸ばし松村の両肩に手を添えようとした。

丁度そのとき、年配の女性が二人礼拝堂に入って来た。川浪は伸ばそうとした両腕をそれ以上動かせなくなり、松村も体を動かしかけたが、川浪と向かいあったまま、その場に立ち尽くしてしまった。川浪は、しかし、松村の憂いを湛えた清純無垢な表情をしっかりと目に刻み込んだ。その可憐さは川浪の魂にしみわたった。松村の瞳はまだ潤んでいたが、更にこぼれ落ちる涙を辛うじてこらえたようであった。

「外に出ましょうか」

と松村が小声で促した。五月下旬なので聖ルカ礼拝堂の外に出ても、午後四時半過ぎなのに

あたりはまだ十分に明るかった。川浪は松村に案内されるまま明石小学校の校庭を左手に見ながら道を右に曲がり、隅田川の堤に出た。^{つつみ}^{しお}潮の匂いの混じった川風が吹いていた。

川浪は松村を気遣って声をかけた。

「けっこう冷たい風だね。寒くない？」

松村はそのことばに答えるかわりに、右腕を川浪の左腕に絡めて、川浪の左肩にそっと自分の頭を預けた。親愛の情を示すためなのか、体を触れ合ってきた松村の行動に、川浪はどう応じてよいものか分からなかった。思案する間もなく松村の体温が伝わってきて、川浪は体の芯が熱くなった。二人はそれからは何も言わずに黙って歩いた。しばらくするとアーチが二つある大きな橋が見えてきた。

「あっ、あの橋、小学生のとき見に来たことがある。勝鬨橋だよね？」

松村は川浪の顔を見て目で頷き、ことばは発しなかった。五分ほど歩くと晴海通りまであと百メートルという地点まできた。そこからは勝鬨橋に向かって緩い傾斜の坂道になっていて、今は誰も歩く人の姿はなかった。

その緩い傾斜を登り始めてすぐに、川浪は体をわずかに左に回して、左肩に寄せられていた松村の右の頬にそっと左手を添えた。そして松村の顔が自分の顔と向き合うようにして、その瞳を見つめた。松村は頬に触れる川浪の手を拒むこともなく、川浪の目を見つめ返した。その澄んだ瞳に自分の顔が映っているのを見て取ると、川浪は一気にことばを吐いた。

「松村さんと一緒にいると、俺、なんかすごく嬉しいんだ」

想いをことばにできたことに川浪は自分でも驚いていた。松村は瞬きもせずに川浪を見つめていたが、改めて目を見張ると、小さいがよく通る声で言った。

「川浪君……私も」

松村は右の頬にあてられた川浪の左手を自分の右手で包むようにぎり、それから互いの手を持ち直して手をつなぐようにした。川浪は心が相手の心と触れ合ったと感じ、胸の血が熱くなぎった。二人は手をつないで坂道の緩い傾斜をゆっくりと登っていった。勝鬨橋のたもとに着いて、晴海通りにでた。

道は週末を過ごす恋人同士や老若男女が行き交いとても賑わっていた。二人はことばを交わすことなく有楽町駅まで歩いた。山手線に乗り込み、川浪は松村を見た。すると松村も川浪を見つめて微笑んだ。二人は体を寄せ合い、つり革につかまった。車内はたいそう込み合っていたが、川浪には松村と二人でいる空間はやはりそこだけ空気がとてもやわらかく感じられるのだった。

私鉄に乗り換える駅に着くと、降りるとき、川浪は告白してから始めて口を開いた。

「家まで送る。一緒にいる時間が長くなるから。いいでしょ？」

松村は川浪の目を見つめて、小さく頷いた。

16

二人はとうとう松村の家の門の前に来た。住宅街は既に夕闇に包まれて静まりかえっていた。二人の姿が門灯の淡い光にほんやりと照らしだされた。松村は川浪の方を向いて右手を小さく振り、門扉をわずかに開けて少し先にある玄関に向かった。

川浪は門扉の前で立っていた。松村は玄関の前に立ったが、戸を開けず、すぐに向き直り、再び門扉のところまで戻ってきた。そして、隅田川の川べりで川浪に応えてから始めてことばを発した。

「川浪君、今日はありがとう……赦して……あげるわ」

そう言って、松村は澄んだ瞳で川浪をまっすぐに見つめ、それからゆっくりと瞼を閉じた。

完

(2018.9.11 受理)